

◎新型コロナウイルス禍で考える日本の行方

◎第 23 回 8 月も「特別な月」

全国日本語学校連合会 研究員 對馬好一

筆者は今年 2 月の本コラム第 17 回で、「2 月は日本と日本国民にとって特別な月である（中略）11 日は『建国記念の日』であり、23 日は『天皇誕生日』です」と書きました。それから半年がたちましたが、今月（8 月）もそれと同じかそれ以上の意味で、この国にとっては「特別な月」だと思っています。

8 月の酷暑の中で第 104 回全国高校野球選手権大会の熱戦が繰り広げられていた兵庫県西宮市の阪神甲子園球場では 15 日正午、大会 10 日目の第 2 試合、高松商業高校（香川県）対九州国際大学付属高校（福岡県）戦 3 回表の九州国際大付の攻撃中に試合を中断し、グラウンドの両校選手、審判、スタンドの観客らが、球場に鳴り響くサイレンの音と共に、先の大戦の戦没者（戦争で亡くなった人）の御霊に対し黙祷を捧げました。

同じ時刻、東京・北の丸公園の日本武道館では天皇皇后両陛下が全国戦没者追悼式に臨席され、岸田文雄首相や衆参両院議長、戦没者遺族ら 992 人と共に戦没者の御霊を慰める標柱を前に黙祷されました。

黙祷の後、陛下は、戦陣に散り戦禍に倒れた人々に対し心から追悼の意を表するとともに、「私たちは今、新型コロナウイルス感染症の感染拡大による様々な困難に直面していますが、私たち皆が心をつにし、力を合わせてこの難しい状況を乗り越え、今後とも、人々の幸せと平和を希求し続けていくことを心から願います」とお言葉を述べられました。

77 年前の昭和 20（1945）年のこの日に終戦を迎えた先の大戦で亡くなった 310 万人の冥福を祈るため、この式典のほかにも、全国各地の護国神社、東京・九段の靖国神社、東京・三番町の千鳥ヶ淵戦没者墓苑などには今年も参拝者の列が続きました。また、地方自治体の多くは戦没者慰霊式などを行いました。

終戦の日に先立つ 6 日には広島、9 日には長崎で米国が原子爆弾を落としてから 77 年目の

日を迎え、それぞれ平和祈念式典が催され、被爆者^{ひばくしや}やその子孫が、原子爆弾の犠牲になった方々の冥福を祈りました。広島^{ひろしま}の式典には国際連合のアントニオ・グテーレス事務総長も参列しました。

戦争ではありませんが、群馬県・御巣鷹山^{おすたかやま}で東京（羽田）発大阪（伊丹^{いたみ}）行の日航123便ジャンボジェット機^{ついでん}が墜落^{ついでん}して520人の尊い命が失われたのも、37年前の昭和60（1985）年8月12日でした。同県上野村では今年も慰霊祭が行われたほか、御巣鷹山では前日から関係者が慰霊登山をしました。

こうした思いが重なり、暑い季節に重い空気が国中を覆うのが日本の8月なのです。そして、終戦の日を含む8月13～16日は毎年、お盆休みです。お盆は、夏に祖先の霊を祭る行事で、日本古来の、亡くなった先祖からのつながりを大切にする祖霊信仰と仏教が融合した行事だといわれています。この時期、青森のねぶた、秋田の竿灯^{かんとう}、仙台の七夕、徳島の阿波

踊り^{おどり}など、各地で様々な夏祭りが行われ、そこにお迎えした先祖の御霊の安寧を祈ります。

一昨年、昨年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、人が集まる催しは見送られていましたが、今年はコロナ対策の行動制限緩和で3年ぶりに本格的な祭りが復活したところが多いそうです。そしてお盆最終日の16日には、京都五山^{ござん}の送り火に代表される「送り盆」を各地域や家庭で行い、御霊をお送りします。

東京のお盆の催しは、靖国神社のみたままつりなど、7月に行うことが多いのですが、全国的には、8月のこの期間に実施する地域が多くなっています。そのため、都市部ではこの時期に休業する企業が多く、新幹線や航空機、高速道路などの大都市から地方に向かう交通機関は帰省客で混雑します。今年のお盆は、こうした混雑も復活しました。この人の流れでコロナ禍がこれ以上拡大しないことを祈るばかりですが、日本古来の、先祖を敬い自分の今後の過ごし方を見つめる習慣が復活したことはいいことでしょう。

お盆は全国各地に伝わる夏のイベントではありますが、戦禍に散った先達への慰霊がこの時期に重なるのは単なる偶然だとは言えない気がします。8月のこの国は暑さの中で祈りに包まれ、それが過ぎると秋の収穫の時期を迎えるのです。

各地のお祭りに参加したり帰省したり、休みを使って旅行する人たちの中には若い人が多くいて、幼子の手を引いている姿もよく見受けられます。田舎に帰り、先祖の霊に手を合わせるのでしょうか、テレビニュースの画面でインタビューに答える彼らは、「コロナ禍のお陰でできなかった帰省や旅行が3年ぶりにできるので、ゆっくりしてきたい」とコメントして、幸せそうな笑顔を見せています。これも祖霊信仰なのでしょう。

そうした中で今年、海外に目を向ければ、ロシアのウクライナ侵攻はご存知の通りです

し、中国軍は今月に入り台湾周辺で訓練を繰り返し、少なくとも5発のミサイルが日本の排他的経済水域（EEZ）に着弾しました。沖縄県石垣市の尖閣諸島には連日、中国海警局の船が領海外側の接続水域に押し寄せて日本漁船を追い回し、時には領海侵入も犯しています。中露両国軍の航空機や艦船が日本列島の周りを航行していることは、この欄でも紹介しました。北朝鮮は日本海に向けミサイル発射を繰り返し、7回目の核実験の準備もできているといます。

茶道の裏千家の千玄室・前家元は8月15日付『産経新聞』のコラム『一服どうぞ』欄の「『敗戦の日』に思う」と題した文章の中で先の大戦を振り返り、「あの大战で日本のほとんどの都市は無差別爆撃で廃墟も同然となり、最後には広島、長崎に原子爆弾まで投下され、多くの国民が犠牲になった」と指摘しています。そのうえで、「しかし、戦後の復興と繁栄が日本人の底力故に見事に成し遂げられたためか、今の人は歴史の中の古い昔話のように感じておられるようだ」と憂えています。前家元は終戦時、陸軍航空隊の最前線に配属されていたそうです。そうした記憶を思い起こし、将来の平和構築に思いを致すべきだという趣旨でしょう。

ウクライナでは、77年前まで日本国内で起きたのと同じ惨状が今日も繰り返されています。前家元は、軍隊の不保持を定めた日本国憲法第9条をめぐる、「軍隊、軍事力とは一線を画す自衛隊すら認めず一発の弾を撃つことも許さないという考えが今も消えない。これで本当にいざというとき、自力で国民を守れるのだろうか」と疑問を呈しています。そのうえで「何も戦いを奨めているのではない。千利休は一碗のお茶をもって、権力者たちが和やかで穏やかな国造りをできるように、命をかけ努めた」と史実を紹介し、茶道で世界人類の平和と安寧に尽くす考えを示しています。平和を守るためには、実力に裏付けされた外交努力が必要だということでしょう。因みに、利休は16世紀、戦国時代から安土桃山時代の商人、茶人で、茶道を極めました。

日本の戦後生まれの人口は、昨年10月時点で、1億815万4千人と総人口の86.2%に達しているそうです。15日の戦没者追悼式に参加した人も、70歳代以上が8割を占め、最高齢は95歳でした。戦後は遠くになりけりです。その間、私たちは平和を享受してきました。国民の営々とした努力もあり、世界トップクラスの経済大国に成長しました。平和に恵まれた社会で生まれ育った我々は、ウクライナのような惨状を知らずに過ごしてきました。

お盆の時期は年に一度、そういう社会の現状を見直し、自分たちが置かれている世界的な環境をチェックし、この平和をいかに維持して次の世代に継承するかを考える機会なのでしょう。

筆者は今年7月16日、そんな想いでみたままつり最終日の靖国神社に昇殿参拝し、新型コロナウイルスの世界的流行（パンデミック）やウクライナなどの戦火が早く収まることを祈念しながら、境内の能楽堂で唱歌奉納演奏をしました。演奏を聴いて下さった方々の中には、20～30歳代くらいの若い人や外国人が多くいらっしゃいました。そして、8月15日には正午の時報に合わせて自宅で謹んで手を合わせ、戦陣に散った英霊の方々に哀悼の誠を捧げました。